

50582

教科書文庫

5

810

45-1948

20000
65746

Kodak Gray Scale

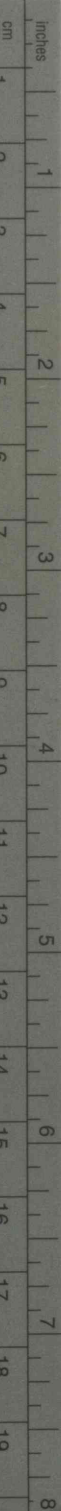
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



4a
810
BB 23

中等國語 三

文部省

(2)



資料室

中等國語 三

文部省



42
810
BB23

目 録

一 樹木賛仰……………一

二 生活断片……………八

三 文化と教養……………十一

四 芭蕉の名句……………十九

五 乙女峠の富士……………二十三

六 銀の燭台……………三十

附録 國語学習の手引……………五十九

一 樹木賛仰

わが家のうしろに、

私は一本のしいの木を持つ。

よく音のするきれいな小川を中にして

かれはその累々たる葉むらの冠を、

さわやかな村路の上に、

深く重たくさしかけている。

喜ばしい青空と太陽との晝間、

村の遠い入口から幾十の立ち木を超えて見えるかれは

まるでさんくと輝く緑のかさのようだ。

また天に百千の星の散って、

ふかふかとした路の奥、そよ風の休息の歌に、

いなかはこんもりと眠る夜、

この村落の中ほどにひとり鬱然として立つかれは

その絶大な翼の下に、

一 樹木賛仰

村を立ちぬかすれぬと思つてゐる事
このは文學イテ多くは感ぜられぬ

しいの木は遠くから見るとかさお様な
又大鳥のような

ひなを守って身を伏せる大鳥のようだ。

村人は知っている、ひとり残らず、
昔かれらがまだ子供であり娘であった時から
こゝに立っているこのしいの木を。
かれらは愛している、この古なじみを。
そのころでさえもこんなに大きかったこの樹木を。
かれの張りまわす豊かな樹陰は、
そこにびろろとや寶石のような小魚や虫のすんでいる
どんなにいい川狩の場所だったか。
またかれが来る秋ごとに落す錆銅の実は
どんなにうれしかったくさんなこまになったか。
しかし、それよりも多くのことを、
かす／＼の歴史を、
かれらの祖父らの世から父らの時代にかけての
百年の昔を、得意を、失意を、
人の世の変わるふち瀬のこと／＼くを、
風こそ、雨こそ、太陽こそ、星こそ、

しいの木を村人が愛している
今つ かづくの 戸火をしるる

銅のまじりたるしいの皮

そして、このしいの木こそ見て来たのだ。
四月に私はかれを愛する。
再生の季節のほがらかにゆるんだ春風が
そよ吹く風のやさしさと甘美とをもつて
年古りさびたかれのいかめしい樹幹を吹きめぐる時、
そのしわみこわばった樹皮のよろいの下にこそ、
新しい命の汁液のこん／＼と流動して、
その大いなる永遠の若さが
自分の内にも呼び覚まされて、
生き動くのを私は感ずる。
それから五月、初夏のころ、
紫のふじの房飾りが甘やかなにおいを放つ幸福の日、
その千万の葉の群れが、
なごみ渡った空の下、
薫る微風にひるがえる音に、
冬に奪われたあの典雅な音楽を、
絶えて久しい自分の愛の詩を、

春風が身を
よけるまぜる
見えたとき
春の風はあま／＼な
命の汁液のこん／＼と流れる
それこそ
自分の心の中にも永遠の若さを
感じる

内には地を踏見まぜせる

ほろりけのあり空

上高し高し又みながやのる

自分自身をまた 詩をよみはやくなかなかな
春にならば 白か詩か 見られたる 三

再び取りもどしたうれしさに身震いする。

夏が来て、深く遠く

天空が深遠な海のようにひらけ、わやわやとある空
はなやかな熱気が終日かれの晝寝を揺る時となれば、
それは大空の下の

光耀と陰影との巨大な集である。光と影の大きな集
せみの歌が周開幾町かの間を震撼し、ふるふるおあるまうた
この天然の堂宇のまわり、空のまわり

青絹のように底びかりする虚空を、又空
玉虫の群れが歓喜に狂って飛びめぐる。出かよりのこころをまめる
またよく晝すぎの空間に電気が満ち、

天がにわかにかき曇って黒雲の層が厚く重なり、
万物ことごとく沈黙して、風がひとり、

つめたくあらく吹き起る時、

かれは身を震わせてその眞晝の夢から覚める。真晝
やがて射あふすいなずま、とどろく雷、とどろくかみなり
それに続いて、地を圧する

可
すまのよきあそび
射あふすいなずま

射あふすいなずま

滝つ瀬のような無量の雨。

わがしいの木はこの時こそ巨人になる、しんになる。
横しぶきの雨の中、紫の風の中、

またおどろなすやみの中で、夕立のする時くうなる空の未見
たえまなく十字を描く黄銅の電光に照らされながら、
かれはその千万ののどもってほえ猛り、

小山のようなたてがみを逆振りして、
おのれをねじ倒そうとするあらしのいきおいに抵抗する。いかまきする

私は忘れない、この夏の日の壯烈な格闘を、何をせうとする
その思い出は安易な時の私を敢然とさせ、

私の魂にいつも断乎たるものを目覚めさせる。何んかあるは、世のま出可
季節が変わって、
雲の美しい秋が来る。あめ
ひとみを洗う清らかな眺望と、
心を喜ばせる默想とに誘われて、
私の毎日の散歩の路が遠くまた廣くなる。
見よ、静観と新涼との並木路の奥に、
叙はしむの成か人間に物を考えさせる
この水の色担と建康の心が自分たも
ほよよ

人間

静観

二 生活断片

景色を写生する時に、どこからどこまで絵に取り入れようかと、いろ／＼にくぎつてみる。そうして、ここはと思う所を画面に収める。

これと同じように、自分の生活を振り返つてみて、何か書こうという時に、どこからどこまで書こうかと苦心することがある。たとえ平凡な生活でも、その中にはきつとその人らしい面影をとゞめるところがあるものである。それを見つけ出すのは、喜びであり、また楽しみでもある。

本課は、女生徒の生活のある断片を記録したものであるが、それ／＼に作者の個性に基づき、女子らしい生活美が現われている。

自分の生活をいたずらに見過ぎさないで、静かな、美しい自分の横顔を見出だして、それを克明に描いてみよう。

生け花

無造作にさされた一輪の花にさえ、私たちはやさしいなごやかな感じを受ける。まして自分の生けた花の前にすわった時には、大きな喜びで胸がいっぱいになるのも、当然のことであろう。このように私たちは生活の中に美を求め、美をつくり出すことに喜びを感じている。この意味から、華道はも

う少し日常生活に溶けこんでもよいのではないだろうか。

華道には、いろ／＼な流派や種類があるが、いづれにしても、理想とするところはたゞ一つ、高い美をつくり出す境地であろう。だがそれは私たち初歩の者には、なか／＼つかむことのできないところであるかもしれない。

「生け花を習得する者は清純な心持で生き／＼とした花を生けるように心がけねばなりません。」と、日ごろから先生にいわれる。清らかな心になつてはじめて美しいお花を生けることができる。

「生華三才の形は、宇宙方円の象より出づ。されば、三枝をさして、天・地・人(または真・流・受)となふ。」

と、書かれたものを読んだことがある。宇宙にたとえた円い空間を、真・流・受の三枝がゆるやかな曲線を描いてくぐる。実際に生ける時には、この根本の形に、真前・止の二枝が加わつて五枝となり、その曲線と統一の美しさが、うしろの掛軸に和合して、落ち着いた静かな世界をつくり出す。このなごやかな雰囲気こそ、私たちの日常生活にとりいれたいものである。

はじめて小枝を手にした時は、どうしても自分の心を集中させることができない。軽く小枝を握つた指先がかすかに震えて、ためらうことなく目的に向かつて飛びこむことがむずかしい。あせればあせるほど、心は乱れて来る。しかし一回、二回と、回数を重ねるたびに、心のあせりも少なくなる。何もかも忘れて一本の小枝に全心を集中した時には、喜びよりも先にほつと安堵の息がもれる。そこには自分とお花のほかには何もない。のび／＼とした形の内に、美しい諧調を保つた曲線が空間を切る。

生けおわった静かな一瞬、喜びがこわばった心を柔らかくする。掛軸の墨の色と小枝の緑がはえる。静かな一瞬。私はこの一瞬を愛する。

華道の高い境地を悟ることはむずかしい。しかし、調和によってつくり出される落ち着いた雰囲気の中に、生活の喜びを見出だし、いつまでもいつまでもそれを愛して行きたい。清らかな人生を送るために、一步一步進んで行く自分自身の姿を、生けおわったお花の上に見出だすのも楽しいことである。

お茶

すっかりもみじした榛名の山を障子の窓越しにながめながら、はちきれそうなひざをそろえて、きょうはじめてとくのえた茶の道具——それも自分でくふうした竹細工とそまつな茶わんであったが——を隣の人のと見比べて氣にしながら先生のおいでになるのを待った。

私は今こゝにみんなと肩を並べてすわっている。やがて障子が静かにあいて、先生がはいっておいでになった。一通りのあいさつがすむと、私の手の上には目にいたいような赤いふくさが載せられた。はじめのうちはふくさのたゞみ方にも首をひねっていたが、今では思うようにはこべるようになった。ことにふくさを三角の形から左手を滑らせて三つに折る時の手ざわりは忘れられないものである。それから……また静かに時は流れる。沈んだ光を反射した茶わんに左手をそえて右手で静かに落す茶せん。この時ひびく音は茶せんを持った人にのみ感じられる音である。時を超えていつも変わらないゆかしいこの音だけが、茶道に学ぶ人々を結びつける音かもしれない。実に古典的な、それでいてやさしい余韻である。床の間の花が揺れ動くかと思われる静かな一瞬。

やがて茶もたておわると、いよ／＼客にその手前を見ていたゞくことになる。

主人になった人々が静かに立つと、白足袋が壁にはえてひとしお心が落ち着く。あいさつをして茶わんを手にした私は、その高いかおりの中でふっと思ひ出した。日本のお茶ほど時間を無視したものはない、あれはひまにまかせてするもので、若い者には必要でない、とよくいわれることば。

お茶は確かに一般には多くひまのある人がたしなんだことは事実かもしれない。しかし私は体験してみてもはじめて、指を一本動かすにもむだがなく、実によく時間をさばっていることに氣がついた。

お茶が私たちの修養にあずかって力のあることは、じつとすわっている忍耐力がつくことからだけでも強く感じられた。毎日の生活がとかくあら／＼しくなりがちな私の行動にもつゝまじさがない、ほんの少しでも落ち着いた豊かな空気にひたることは、なんといいてもうれしいことである。

いつしか鐘も鳴って、この時間も終りとなった。私はおじぎをしながらまた扇子をうしろにまわすのを忘れてしまっているのに氣がついた。

三 文化と教養

文化というとなにか享樂的、娛樂的、少なくとも快適なもの、したがって私たちの生活に附隨的從屬的なもので、欠くべからざるもの、本質的なものではないかのように考えられる場合があります。それどころでなく、そう考えるのがむしろ普通であるかもしれませぬ。文化映画・文化雑誌・文化住宅・文化生活などという場合はそうだと思います。戦時中ある有名な新聞記者のかたが、文化はネクタ

イのようなものだ、戦争の間はやめた方がよいと書いておられたのを私は記憶いたしております。文化というものが生活に附随するぜいたくなものだとしますと、これは非常に適切な比喩（ひゆ）であります。確かにネクタイはあってもよく、なくてもよいものです。夏などは着けない方がかえって衛生的でよろしいかもしれません。文化というものが私たちの生活にとって本質的なものでなく、従属的なぜいたく物であり、したがって人心を懦弱にし、犠牲心とか剛健の精神とかを阻害するものでありますならば、戦時中はやめるのが当然であります。たゞ問題は文化というものがそういうものかどうかということがあります。

文化というのも教養というのもいずれも訳語であります。語源は耕作という意味であります。文化といえば耕作された自然として自然に対して用いられます。例えば原野は自然ですけれども、田畑は文化であります。野草は自然であっても、野菜は文化であるといえます。ところで私たちは耕作いたしますのに、手あたり次第むちゃくちゃに土地を掘る人はなく、それでは耕作ではありません。耕作といえば、まずはじめに形を心に持っていて、それを自然の中へつくりこむこと、いいかえればその形にしたがって自然を形づくることであります。人間は肉眼でものを見るだけでなく、心でも見ることができず。心で見た形を觀念とか、觀念が指導的統一的な力を持った場合には理念とか、イデアとか名づけますが、そういう形を外につくり現わしたものが文化であります。だから文化は精神の表現だといえると思います。精神は生命力を基盤としてその上に成り立つものでありますから、文化は生命力の表現であるともいえます。日本文化は日本民族の生命力であります。したがって宗教でも藝術でも学問でも文化であります。法律制度も経済組織も文化であります。かゝる種類のものだけでない、私たちの日常生活と直接に関係している電信・電話・道路・鉄道・家屋などのようなものでも人間精神の表現としてすべて文化といえるのであります。くわしくいえば心で見た形を自然へつくり入れ、できあがったものを文化財といい、形の意味する価値を文化価値といえます。文化とはかゝるものだとしますと、それは人間生活に本質的なもので、決してネクタイのようなものでなく、戦時中でもないやめられるものでないことは明らかであります。

二

かように文化というものは人間精神の表現として、人間のつくったものであります。いったんつくられると、つくった人間を離れて独立の存在となります。例えばキリスト教はナザレのイエスのつくったものだといわれますが、イエスがはりつけになっても、ユダヤ民族が離散しても、キリスト教はそれとは独立に存立してあります。そうして人間によってつくられた宗教が人間をつくる力を持っているのであります。学問や藝術についても同じであります。なお文化の非常に特別な性質は多人数がそれに参加しても、各人の受け取る分が減らないどころでなく、かえってふえるとさえいえることでもあります。物質は分けると減ることは申すまでもありません。百円をふたりで分けると五十円ずつとなり、四人で分けると二十五円ずつとなります。物質に関しては参加者のできるだけ少ないことを希望するのは人情であって、どうしても争いの起りやすいわけであり、金銭については親子・兄弟・友人・親類等の間にも不和の生じやすいこと、よく人の知るところであります。物質を生活の原理とする限り不和は免れがたいと思えます。國家についても同じことがいえます。世界はどんなに広くとも、領土にも物質にも限りがあります。物質を原理とする限り、紛議と戦争とは免れないところで

あります。

これに反して、文化は分けても減らない。例えばキリスト教はひとりで信じなければ力とならぬわけではありません。それどころではなくて、多人数で教会をつくり、ともに信仰をわかった方が、かえって力を増すともいえるのであります。聖者のめぐみは何億人の心をうるおしても盡きることなく、減ることもないのであります。哲人の知恵についても学者や藝術家の創造についても同じであります。その光は世界を照らし、その恵沢は人類をうるおして盡きることはありません。だから文化を原理とする限り、参加者を制限し拒絶する必要はありません。したがって、もしこの世界に平和が到来できるものならば、文化という超越世界を介することによってのみ可能だと考えられます。文化はつくられたものでありながら、つくったものを離れ、独立した超越世界であります。ここでは人が所有を争う必要はありません。心からの和合をもって恵沢をわち合うことができます。平和の原理は文化でなければならぬわけで、平和國家は文化國家でなければならぬのであります。

三

御承知のように新憲法において、「日本國民は、正義と秩序を基調とする國際平和を誠実に希求し、國權の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、國際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」という「戦争の放棄」を中外に宣言したのであります。いまやわが國はひとり・の兵士をも、一台の飛行機をも、一隻の軍艦さえも持たない。それにもかゝらず、文化の高い國家であることを念願しない日本人はなく、また多くの日本人はそれを期待してゐるであらうでしょう。けれども、武力を全然持たないで高い文化を持つていた國家というものは歴史の上には存在しませんでした。

私たちは史上かつてあつたことのない國家、即ち武力なき高度の文化國家、権力なくしてしかも權威のある國家、逆説的にいえば、弱くして強い國家を建設しようというのであります。國家の強大な権力は武力なしには不可能であります。權威は武力なしにも可能だと考えられます。なぜと申しますに、道徳力のあるところに權威はあり、武力において弱くとも道徳力において強いことは可能だからであります。私はもとより國家道徳を個人道徳と同一視するものではありません。そこに段階の相違を承認せざるを得ません。けれども國家衰滅の原因は、決して武力や経済力の不足にあるのではなくして、道徳の頹廢たはいにあることは歴史の明証するところで、現に私たちが血涙をもつて体験しつつある事實であります。國內に道理が行われて無理がなく、したがって人の和の支配する國が外敵のために滅ぼされたという例はないと思ひます。國家衰亡の原因が外になくして内にあることは古來聖賢の教えるところであります。武力や経済力以外にも道徳力という力があり、しかもこれが國力の根源であることを忘れてはならないと思ひます。平和國家は文化國家でなければなりません。文化國家はそれ故に道義國家としてのみ存立しようと考へられるのであります。道義國家は弱くして強い國といえるのであります。

そういう國家はこれまでには存在しなかつたけれども、それ自身決して不可能とはいへぬと思ひます。かつ新時代は新しい國家理念を生んでも不思議はありません。いまや世界は交通運輸機關の発達によって極度に狭くされ、二次の大戦を経て全世界が共同の運命をにない、共同の新秩序を考へる新時代になつたと思ひます。武力なき文化國家の理念はそういう新時代の新理念であつて、世界制覇の野望などよりもはるかに現実性を持つと考へられます。たゞ問題は日本民族にそういう実力がある

かということであります。ところで民族の生命力の表現たる文化は、日本民族の實力を十分に示しているといつてさしつかえないと思ひます。戦前戦時中私たちはあまりうぬぼれすぎましたが、反対に現在は卑屈になってはいはしないでしょうか。卑屈のよくないことは自負高慢のよくないのと同じで、ともに排斥されねばなりません。藝術・学問・宗教などにおいて日本民族の示した業績、外國文化を攝取して完全に自己のものとなした消化力は相当高く評價されなければなりません。それは自信と矜持じやうぢを持たしむるに十分だといふべきであります。もし文化國家の建設ができぬならば、古人のいわゆる「能はざるにあらず、爲さざるなり。」といふべきであらうと思ひます。

それならば、そういう國家の創造建設のために私たちは各自に何をなしたらばよろしいでしょうか。それには、各人が力を養い、力のある人間にならねばならぬと思われれます。少しわき道にそれますが、よく日本では女性の位置が低いとか、軽んぜられるとかいわれます。しかし力があるのに女性だから軽んじ、力がないのに男性ならば重んずるといふことがありましようか。事実、力のある婦人方はそれ／＼の範圍において敬重されています。もしわが國で女性が男性に比して一般にその地位が低いというならば、それは女性の力がおしなべて男性に及ばぬからだと思います。それでは人間としての力とはどういふものでしょうか。力のある人というとき、知力とか財力とかを持った人がまず考えられます。知力や財力は確かに力であります。体力もそうであります。しかし、人間としての力の根本は道徳力でなければなりません。独立の生活の営める程度の財力、体力(健康)、知識技能力、道徳力が人間としての力を成り立たせているといえるであらましよう。もとよりこれは一つの人格力なのですが、分析するところいう要素が考えられると思ひます。力ある人間たるためには道徳力が根本であり

ますが、道徳力の中核をなすのはよき心構えであります。これが人格のかなめであります。眼目であります。よき心構えがなければ、知識技能力も体力も、財力も人間の力とならぬことはいふまでもありません。それどころでなく、勇氣とか忍耐克己のごとき古來尊重されて來たもの／＼の徳であつても、よき心構えを根底としてはじめて徳であり力でありうることは、勇氣のある盜賊などは社会のやっかいものであることを考へてみれば事理明白であります。

それではよき心構えさえあれば十分かというに、よき心構えはぜひともなければならぬ條件ではあります。十分な條件とはいへません。思考は人間の偉大性であります。考へたことのまぢがうことのあるところから、いろ／＼な悲劇が生まれて來ます。多くの非合法な事件なども当事者はよき心構えからした良心的な行動かもしれませぬ。私たちは良心的だといつて安心してゐるわけにゆかないのであります。自分のよしとなしたことが眞によくなければならぬ。即ち、主観的によしとしたことが客観的によくなければならぬのであります。それには良心に理知と思慮とが伴わなければならぬ。したがつて教養が必要となつて來るわけであります。それで教養について述べることにいたします。

四

教養 (culture) は元來、耕作という意味の語であります。身につかぬ知識を雜然と持つてゐることではなくして、耕された心だといえると思ひます。自然のまゝの心には、わがまゝ・怠惰・嫉妬心しやくしやくしんなど、いわば、いろ／＼の雜草があります。知識を血となし肉となして知性を開發し、かゝる粗野な心を超えることが教養であります。教養されない心は我欲に執着し、我欲に束縛されてあります。こ

れに反して教養された心は我執から自由であります。無教養も教養もさまざまの形をとって現われませんが、教養はまず思慮として重大な役目をつとめます。人は一般によきことを希求いたしますが、何がよきかは一々の場合に決断されねばなりませんから、人生において思慮の持つ役目は重大であります。もし私たちのよしと考えたことが、いつでも必ずよきものならば、人生は比較的容易だといえるでありましょう。しかし、やゝもすれば過誤を犯す危険のあるところに人生のむずかしさがあり、またそこに苦勞とともに生きがいがあるともいえます。過誤を避け中正を教えるのは思慮であり、思慮は教養によって養われます。教養はもっぱら中正として現われます。ものの考え方から姿容・服装・言語・態度・動作にいたるまで極端偏頗でないのが普通であります。これに反して、けばくしさ・おきょう・不自然・無作法・虚飾、例えば喜怒哀樂のおきげさな表現、強い嫉妬心、うわさずき・悪声・尊大・卑屈のようなものは、すべて無教養のしるしだといえると思えます。教養人は極端でない、例えればくしいおしゃれをしない、しかし身だしなみを忘れません。人生の不幸に対して冷淡でありません、それどころでなく敏感であります。しかし、幸運にもむやみに喜ばず、悲運にも絶望いたしません。根本において我執としたがって嫉妬心とを超えた自由人でありますから、他人のよきことをねたまず、自分の周囲にすぐれた人のいることをかえって喜ぶるのであり、教養とはこういうものかと思えますが、日々つとめてやまなければ各自の器量に應じて身につけることができると思えます。

私には人生というものはそう楽なものだと思えません。人生の目的を快樂だといえますならば幻滅あるのみではないでしょうか。「生は悩み」ということには十分な眞理性があると考えられます。それならば悩みの多い人生とは、そもく何を意味するのでありましょうか。人生の意味に関する私見をもってこの話を終りたいと思えます。私の考えでは歴史は神意の実現される場所であります。しかも、神意はひとりでに実現されるものでなくて、それは人間を通じてはじめて可能であります。神意を宿しうるところに人間性の尊厳があり、神意実現の道具となり、媒介者となるのが人生の意味だと私は信ずる者であります。そうして、誠実のあるところに神意は宿ります。私たちは外面的仮象に迷わされてはなりません。はなやかな生活にも空虚なものもあり、一見みすばらしい生存にも神意を宿す充実がありうるわけであります。誠実のあるところに神意が宿り、人生の意味と光榮とのあることを信じ、それくの持ち場において誠を盡くしたいと思えます。

(天野貞祐の文による)

四 芭蕉の名句

山路来て何やらゆかしすみれぐさ

これは「野ざらし紀行」中の句である。芭蕉は奈良で二月堂の水取りの行事を拜観し、京都を経て大津に向かった。この句は京都から大津に出る山路での吟だという。山科から小関越でもして行ったのであろう。あまり人も通らないさびしい山路である。そこに小さなかわいらしいすみれの花が咲いている。だれに見られ、だれに賞されようというのでもない。たゞ自然の催しのまゝに咲き出た花である。それが芭蕉の目にはこの上もない美しさに映った。いや美しいというよりも、それはむしろ奥ゆ

かしい感じである。路傍にふとこの一莖の花を見出だした芭蕉の心は、全く「何やらゆかし」という思いにしみくと満たされて行ったのである。

「三冊子」によると、はじめ上五は「何となく」であったという。また一本には「何とはなしに」ともなっている。それを後に「山路来て」と改めたのである。初案ではあまりに説明にすぎるきらいがある。山路のさまをそのままに敘した方が、ゆかしさの情を深めるのに効果的である。

閑かさや岩にしみ入るせみの声

「奥の細道」の旅中、羽前の立石寺にもうでてよんだ句である。紀行の本文には、「山上の堂に登る。

岩にはほを重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて、こけなめらかに、岩上の院々とびらを閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり、岩をはひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄み行くのみ覚ゆ。」とある。塵寰を離れた山寺の境内は寂寞と静まりかえって、物音一つも聞えない。まことに心も澄み行くような思いがする。おりからその寂寞を破ってせみが鳴き出した。芭蕉がこの寺にもうでたのは旧曆五月のことだから、またはつぜみのころである。せみの声といっても眞夏のようにやかましく鳴き立てたのではない。おそらくはたゞ一匹のせみであったのだろう。けれどもとにかく全山の静けさはそれで破られたのである。しかも、それは決して静けさをかき乱すものではなかった。じつと耳を傾けていると、そのせみの声はこの静寂の中に溶けこんで、やがてそこらの古びた大きな岩の中までしみ入って行くように感ぜられるのである。

なおこの句は「初蟬集」などには「さびしさや岩にしみこむせみの声」と出てあり、これが初案の形であったと思われる。もとよりさびしいとも感じられたのであるが、「閑かさや」という端的な表現を芭蕉は最後に選んだのである。また「しみこむ」より「しみ入る」の方が、一筋に深められて行く静けさが感ぜられる。

白露をこぼさぬはぎのうねりかな

これは「芭蕉庵小文庫」や「類柑子」などには、上五が「白露も」とあるが、どうしてもをでなくてはならぬ。

露もたわゝに置いたはぎの枝がしなやかにたわんでいる。それがあかかなきかの微風に、うねりと動く。しかも白露はこぼれもしないのである。そうしたはぎの細枝のいかにもなやかな、そして静かな動きを、「白露をこぼさぬ」ということばで表わしたのである。それが「白露も」であると、こぼれやすい露さえも落さないという合理的な判断が加わることになる。いわゆる物事をことわった言い方で、そこには美に対する感情として不純なものが混ざる。こゝはどうしても「白露を」とすなわな言い方でなければならぬ。それは合理的な説明ではない。はぎの枝が柔らかに静かにうねりゆらぐ美しさを、葉に宿した白露をこぼさないというところに感得したのである。それははぎのうねりのしなやかさ・柔らかさ・豊かさ・こまやかさに、深く見入った心におのずから浮かんだことばであったろう。

この句は画賛であると伝えられ、いかにも画賛にふさわしい句である。しかし最初は実際のはぎを見ての句であったかも知れぬ。うねりというのとはもとより動的の姿である。しかしそれが白露をこぼさないほどの動きとしてとらえられた瞬間、柔らかに屈曲した枝はそのまま美しい線を描いて絵になっってしまう。しかもその絵は單なる写生ではない。いわばうねりの美しさが、しなやかな線に固定し

象徴されたような絵である。それだけこのうねりということばは、写生以上の深みを持っている。この一語に芭蕉の苦心を見なければならぬ。

旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる

芭蕉 最後の吟

芭蕉の最後の吟としてよく知られている。支考の「笈日記」によれば、元禄七年十月八日の夜、病中の芭蕉は深更に及んで急に門人を召して、すゞりに墨をすらせた。そうしてこの一句を残したのであるという。それがついに生涯のかたみとなったのである。芭蕉はそのおりなお「枯れ野をめぐる夢心」とも「なほかけめぐる夢心」とも案じて、いづれがよかろうと門人に相談しながら、「はた生死の轉變を前に置きながら発句すべきわざにもあらねど、よのつねこの道を心にこめて、年もや、半百に過ぎたれば、いねては朝雲暮煙の間をかけり、さめては山水野鳥の声に驚く、これを佛の妄執と戒めたまへる、たゞちに今の身の上に覚えはべるなり。この後はたゞ生前の俳諧を忘れんとのみ思ふは。」(笈日記)と返す、悔んだという。臨終のおりまでも絶ちがたい風雅への執着をみずから嘆じたのである。しかしこうして重態の病床にありながらも、一句の上の思いをひそめるといふのは、芭蕉にとつては実に「これさへ妄執ながら、風雅の上に死なん身身の道をせつに思ふ。」(枯尾花)が故であった。所詮風雅に徹して生きるほかに道のない自分であることを芭蕉は知っていたのである。このいわゆる妄執とともに一生を終ることは、むしろかれの願うところであった。

芭蕉は今旅に病んですでに死と対している。さまざまの思いがかれの胸には浮かんたことである。しかしその中でも何よりも強くかれの心を動かすものは、風雅への愛着であった。このたびは西は筑紫のはてまでも極めようと思ひ立つた旅路も、まだ半ばにも達しないうちにむなしく病にふさねばならなくなった。再びいえてわらじを踏みしめることもおぼつかない。そう思うと、夢のうちにもなお心は枯れ野をかけめぐるのである。旅に対する強い執着が、恐ろしいほどの力で言い表わされている。一生を詩にやせ旅に終った芭蕉の最後の句として、まことにふさわしい一句である。

(頼原退蔵の文による)

うめが香にのつと日の出る山路かな

ほろ／＼とやまぶき散るか滝の音

さみだれの空吹き落せ大井川

朝露によごれて涼しうりのどろ

赤々と日はつれなくも秋の風

荒海や佐渡に横たふ天の川

初しぐれさるも小蓑をほしげなり

さびさらば雪見にころぶところまで

五 乙女峠の富士

どこかで掛時計がのどかに正午を打っているのを聞きながら、さびしい仙石原村の宿を出はずれて御殿場道にかゝると、急に日の色が薄れるように思った。シャツ一枚の汗ばむはだがひやりとした。宮の下でちよつとこのところでバスをのがした私は、二時間も間があるという次のを待つことができ

うめが香にのつと日の出る山路かな
ほろ／＼とやまぶき散るか滝の音
さみだれの空吹き落せ大井川
朝露によごれて涼しうりのどろ
赤々と日はつれなくも秋の風
荒海や佐渡に横たふ天の川
初しぐれさるも小蓑をほしげなり
さびさらば雪見にころぶところまで

風景文

けきを見たり
思ふ事なき

ず、そこから一里半ほどの道をずつと足ばやに登って来た。見あげると天心に淡い巻雲が広がって来て、それが日の光をさえぎっている。山の上のきびしい大気もひしと感じられる。しかし、ようやく行手に迫った外輪山の峰々をかざる空は青く暖かに晴れている。雲のかゝらぬうちと、私はまた足を速めた。つえの石突きが石をはじいてから〜と鳴る。

道ばたの小さなからぼりの岸にすわって、ひとりの若い農婦が静かにやぎに草を飼っている。南は廣く緩く傾いて遠くまで開け、そのはてはまた次第に盛りあがって一帯の丘を成している。見たところ畑にも道にも人影はない。初冬の山村はうつろな明かるい空氣の中に低く平らに静まり返っている。

道はやがて雑木林に入り、ところどころかえでのみじが血の色をしている。からすがどこかの枝にいて一声二声鳴くのがあたりにはびき渡る。少しづつ登りになり、左右とも針葉樹の林になる。ひのきの林が立ち木のまゝ皮をはがれた所がある。南側の斜面の松原を開いて数町も畑にしてある。切り株を残したまゝ麦がまかれていて、一條二條煙が立っているが、人は見えない。その向こうにはゴルフリンクの枯れ色が広がっていて、その上にところどころにうしが草をはんでいて、

暗いすぎ山の下に「乙女峠道」と白いの立つ所へ来て、右へ折れて山道にはいる。木立の間から峠が真上に見あげられる。まもなくすぎ林は盡き、半ば葉を落した雑木の疎林の中に石ころの道がじくじくについている。たちまち息苦しくなり、背にも額にも汗が流れる。しかし、やがてからだじゅうにいいよのない快感がわき、精神も快く興奮して来る。急にさまゝな思いが力づいて生き〜と心を駆けめぐる。こうして山に登ることもずいぶん久しぶりだ。日の照る石ころの道、枯れ草の色、あゝ息づかい、あゝこれだなと思う。今登って来た仙石原のながめが眼下にだん〜開けて来るのを

見やりながら足をとめずに登る。仙石原を隔てた向こうには駒が岳が大きく伸びあがって来た。

二十五分ほど登った時、急に頭上にかすかに人声がした。立ちどまって見あげるともう頂に近い。その枯れ草の中に群童の影がさす。遠足かもしれない。私は汗をぬぐい、一息つき、下をながめた。駒が岳のすそには蘆の湖の水の色が少し現われて来た。また歩き出し、いくらも行かぬうちに急に目の前が開け、思いもかけずちやうど目の高さの道の上に、真向かいの空に遠く白く輝く頂を見た。私は残る数歩を登りもやらず立ちどまったまゝその光を見つめた。

私は小走りに出て行って、峠の平の端にある腰掛に腰をおろし、背負袋もそのまゝ、くぬぎの木立をすかして、しばし銀のみねをながめていた。

あわ〜と薄ら日の光がさしている廣い静かな天地の中に、空にとゞく一所だけが白く凍ったように輝いている。明らかな形を中空に刻んだ峰が何もない大きな空間を隔てて、私に向かつて目の前にそこにある。今雪を振りかけたと思われるあたらしさで、頂からは幾筋かのあい色が下へ流れている。取りつく島もない無言の沈黙が天地を領し、私はそのけはいにのまれている。その清い峰を下から押し包むように、厚い綿雲が中腹を巻いている。綿雲の端は北の空へ濛々となびいて、そのがわのすその形を隠してしまっている。

頂から上は高く晴れて白いかすかな巻雲を浮かべ、それが流れて私の頭の上まで続いている。綿雲の巻いた下は雪はなく、暖かく黒ずんだすそ野がたゞ大きく遠く一面に広がっている。南のすそはさえぎるものなくどこまでも緩やかに流れて、その末は愛鷹山の続きが、これは少し日を負うて黒く盛りあがっている。北の方を見ると、甲州の山々が赤ちゃけた枯れ色にはてしなく波うち、その上に團

圃と積雲を横たえている。そのまた奥の天際には、まだ雪もない信濃の山々が見え隠れしている。

あかず、と見こう見しているうちに、右手の小高い所に集まっていた遠足の一隊は、私のいる横の道をさぐめきあつて御殿場がわへ駆けあつて行った。引率の若い先生は私とちよつとあいさつをかわし、新しい軍靴を鳴らして生徒を追って行った。

私は毛編みの上着を出して引っかけながら、今までわらべどものいた草原へ登って行った。たゞ元氣なまゝのかれらが去った跡には紙くずが散らばって狼藉を極めていた。そこからは内側のながめもあつて火口丘と火口原が見渡せる。時計は一時をちよつとまわっている。私は弁当の包みを出してひなたの枯れ草の上に腰をおろした。そうしてみると富士はすゞきの穂の間に隠れてしまう。それにもう少し南へ移れば、愛鷹山の向こうには海が見えるはずだ。そう思つてまた背負袋をさげて立ちあがった。目の下の、さつき私がいいた峠の道にひよつこりとひとりの獵師が黒いぬを連れて現われ、また仙石原へ向かつてあつて行った。

私は尾根傳いになお南へ登って行った。もう行き会う人もなかった。短くまごさの中の道には、りんどうが色あせた花を着け、あざみが白く立ち枯れている。灌木の茂みの中にやぶこうじのあかい実も見た。丸岳の雑木林を抜けるとまた廣い草場となり、ながめが開けて来る。だら／＼と南へくだる道の左手には蘆の湖が全景を現わし、駒が岳はや／＼傾いていよ／＼大きく、右手には愛鷹山の肩越しに駿河湾が白く光つて空につらなっている。沼津の海も見え、その向こうには伊豆の山々が幾重にも重なつて見渡せる。

どこを見ても黒ずんでさびしい。山々は黒い不吉な影を作つて波うっている。その蕭條たる天地の間に、たゞ白銀の富士だけが天際にいよ／＼明かるく光っている。

富士のうなじを巻いた綿雲の上のへりが毛ばだつて、しきりに動くようだ。時にはそのひとひらがなびいて頂の形を隠しそうにもする。その綿雲がすそ野へかけて円く大きく影を落している。その影の中に二所ほどかすかに明かるいのは、雲の切れ目があるらしい。すそ野の一带に黒ずんだ色の中にも、かつ色の草野とあち黒い森とが見分けられる。模様がこまかくこみいった所は村落である。その間にところどころ並んだ筋が見えるのは耕した跡である。小さな光る鏡は貯水池である。白い煙を揚げている所もある。

そのうちに頂の雲の動きがにわかにかつばつになつたように思った。立ちのぼる雲のきれの幾つかは競い合うように見る／＼輝く峰を押し包み、そのはるか上までのぼつて高い塔を築いた。私はなおしばらく見守つたが、塔はもう崩れそうもなかった。富士はいま隠れたらしかつた。

私はその道の上に袋や帽子やつえを投げ出し、弁当の包みを開いて並べ、そのそばに寝そべつた。二時に近い。こうしていると、山の上の日ざしはほちやくびにあつく感じられる。私は黒い山ひだの間にあたゝえた無氣味な蘆の湖を見、また振り返つて雲を深くかぶつた富士をながめた。雲はさつきよりはまた厚く重くなつた。

弁当の包みの中にあつた一本のたばこをすいながら寝ころんでみると、時おりかすかな風があたりなくまごさを鳴らして過ぎる。その音がやむと急にひっそりとして何も聞えなくなる。小鳥の声ひとつしない。ふもとの村の音もこゝまではとどかない。私はや／＼傾いたさびしい日ざしを浴びながら、あら／＼しく起伏する大地のこぶの一角にぼつんと取り残されているのだと思つている。手足は快く

疲れ、心は静かに落ち着いている。

これらの山々はあの遠い低地の人里に何かあるのかまるで知りもしない。私がいくら目を凝らして見たところで、たゞ遠く一面にかすんだものしか映らない。耳をそばだててもなんのけいも聞きとめることはできない。あそこには何かがあるのだろう。私に見えるのは、高い冬の日と、その光に照らされた黒い大地と、その間の廣い空虚を行き來する白い軽い雲とだけだ。しかし、この山だつて永久に変わらなかつたのではあるまい。いつか地の底から火となつて噴き出し、やがてそれがさめて石となり土となり、草を生やし生き物を住まわすようになつたのだろう。またその昔は、地表がくまもなく煮えたぎつて、その上を暗く雲霧がとざし、雨風が絶えまなく荒れ狂つていたのだろう。更にその先は、巨大な一塊の灼熱したガスだつたらう。この遠い長い変化の中では人間のきようあすのことは無に等しいので、その長い／＼律動を測る感覚を私たちは持たない。この奇怪な想像はほとんど私たちを絶望させる。

しかし実はその反対に、私もこの想像の世界のように悠久ゆうくに長く遠くなつたと考えてひそかに慰められる。

しかし私は決して山になつたのではない。私はやはりこゝにひとりうづくまつて考えている者だ。私はまもなく立つてふもとへおりて行かなくてはならない。私はきのうまでのようにまた人々と心から話を交し、まじめに活計に心を勞し、こんな感想もたちまち忘れてしまふほかない。私はふもとにあるものをかすかな小さなものと思つている。しかし、ふもとの人里から見れば、山の上のこの私はまた一匹の虫にすぎない。

もしそうだとすると——、今私がこうしてながめているように、山河は果たして永久なものだろうか。永久にひとり変わり行く天地がほんとうで、人間の生死や愛憎はうそであらうか。この私は果たしてなんでもないものであらうか。

そうではあるまい。実に私も山河の間にその一端片として生まれたものだ。天地の悠久な變轉の一節に私も生まれたものだ。もし天地が変わることなく嚴存するとすると、この私だつてやはりそうではなくてはならぬ。そしてその山河を永久なものとながめているのはほかならぬ私の目だ。私の目が見ているのだ。いや何か知らぬがあるものがわれとわが身をながめているのだ。もし私が見ないとしたら、日月も山河もそれ自身果たして壯大たりうるだらうか。山河の壯大を感じる私自身が壯大なのではないか。

今私はこゝで悠々と空想にふけつていけるけれども、日の暮れるのを恐れて、やがてあたふたとふもとへおりて行かなくてはならない。あの一色に無事に暮れて行くような平野にはどんな不安があり、どんな錯誤があるかもしれない。私はそこへもどつて行くほかないのだし、行けばたちまち渦中うずなにある。すべてが人のことだ。私はもつ／＼人であり、そのほかのものではないのだ。人の苦しみを苦しみ、人の戦いを戦い、そして生きなければならぬ。それがあの遠い低いところに行われている法則ではないのか。人はかえつてそれを永久とも壯大とも見ようとはしない。

日はようやく傾いて、厚く雲をかぶつた富士はそのな／＼めな光の中に煙っている。駿河湾は水と空とを分かつた、いよ／＼まばゆく光っている。振り返ると、暮れかゝつた明神が岳はおびたゞしくまっ白な雲を吐いてしきりに吹きおろしている。駒が岳の肩にもなすつたように雲がかゝつた。一流れの

速い霧が私をかすめて冷えた空にのぼって行った。私はやちら立って身じたくをして、長尾峠目ざしてくだりにかゝった。

(佐藤信衛の文による)

六 銀の燭台

現代の目録

この物語は、フランスのビクトルユーゴーの作である。かれは社会の動搖の激しい時代に生まれ、詩人としてはロマンティック運動の主唱者であり、政客としては民主派であり、熱情の人であった。かれは当時の社会の底にうごめき苦しんでいるみじめな人たち(レミゼラブル)のことを考え、またこのような人たちを生み出した社会の欠陥をとり除こうと願っていた。そして五箇年間の努力によって、これを書きあげた。

本課は、長い小説「レミゼラブル」の一節をとりあげたのであるが、この文の中からも作者の意図するものをうかがうことができるであろう。われ／＼は、このような長い作品を読破する力を養って行かねばならぬ。中途であきてやめてしまったりしないように、読書の喜びと価値とを体験して行きたい。本課の読後感をお互に発表したり、また脚色したり、時には演出してみたりすることも、おもしろいであろう。

一八一五年のある日の夕暮れ、ひとりの旅人が、てく／＼とディーニユの小さな町へはいつて来た。窓ぎわや、入口にいた二、三の人たちは、うす氣味の悪いこゝちでこの旅人をながめていた。こんなにおちぶれた様子をした通行人は、ほかにあまり見当たらなかった。中背で、骨格のたくましいじょ

うぶそうな男であった。縁のだらしなくさがった革の帽子をまぶかにかぶっていたが、顔は、日や風にさらされて赤くなり、汗がたら／＼流れていた。毛深い胸は、えりもとで小さな銀の金具でしめたあらい黄色いシャツの上からも、よく見えた。なわのようによれた青いネクタイと、切れてみすぼらしいそまつな青ズボンと、片側はもえぎの小ぎれを当てる麻糸で縫いつけた、古いぼろ／＼なねずみ色の職工服とを着けていた。背中には中みの相当にはいつているはいのうを背負って、手には、恐ろしく太い節だらけのステッキを持っていた。足は、くつ下もはかないで、底に大きなびよりの打つてあるくつをはいていた。そうして、長いひげを生やしていた。

その疲れた様子から見ると、この男は、一日じゅう歩いてきたに違いない。この町の下町の方の女たちの中には、この男が、町はずれの木の下で休んだり、清水のわく所で水を飲んだりしたのを、見た者があつた。あとをつけて行った子供の話によると、ものの二百歩も行かないうちに踏みとどまつては、また、市場の井戸で水を飲んだりしたということである。よほど、のどがかわいていたに違いない。

旅人は、市役所の前まで来ると、そこへはいり、十五分ばかりして出て来て、今度は一番りっぱな宿屋の方へ足を向けた。そうして、その表通りに面した台所へ、すぐにはいつて行った。なべ類は、盛んに湯げをたて、かまどの火は、強いいきおいでち／＼と燃えていた。料理番のかしらを兼ねている宿屋の主人は、隣のへやで声高に笑い話をしている四、五人の馬力たちのために、おいしいような料理をこしらえていた。ひどくいそがしうに、火の方へ行ったり、なべの方へ来たりしていた。肉のはち切れるようなモルモットや、そのまわりに並べてある小鳥や、がちょうは、長い焼きぐ

しにまゐるようになってゐるし、なべの中には、二匹の大きないと、一匹のますが料理しかけてあつた。

主人は、戸があいてだれかはいつて來たのを聞きつけたが、なべから目をあげもしないで、

「お客様、何をさしあげましょうか。」と言つた。

「何かたべるものをください。それからとめてくれませんか。」

「ちやすい御用です。」と、主人は言つたが、頭を向けて旅人の方を一目見た時、

「お金さえいたゞけば。」とつけ加えた。

「金は持っています。」

「さようでしたら、なんなりともさしあげます。」

旅人は、ポケットから財布をちよつと出しかけたが、どうしたのか、また、ポケットにそれを入れ
てしまった。それから、はいのうをおろして入口の近くへ置き、ステッキをついたまゝ火のそばの低
い腰掛にかけた。けれども、主人は、行つたり來たりしながら、旅人を注意深くながめていた。

「飯のしたくはすぐできますか。」

「はい、たゞいま。」

この客が、火に背中を向けてあつていた時、主人は、ポケットから鉛筆を出して、古紙のはしに
何か一、二行書いてたゞみ、それを給仕に渡した。それから一言耳打ちしたが、給仕は、すぐ市役所
の方をさして駆けて行つた。

旅人は、こんなことには少しも氣がつかないで、また、二度めの催促をした。

「したくはできましたか。」

「はい、もうちよつと、どうぞ。」と、主人は言つた。

給仕は、紙を持って帰つて來た。主人は、急いでそれを開いて氣をつけて読んでゐる様子であつた
が、それから、首を傾けてちよつと考えていた。けれどもすぐ、取り乱したように何か考へにふけつ
てゐる旅人の方へ一足進んで、

「あなた、お氣の毒ですが、おことわりいたします。」と言つた。

旅人は、中腰に立ちあがつて、

「なぜですか。私が金を拂わないと思つてですか。それとも、前勘定で拂えといふのですか。私は、
金は持っていますよ。」と言つた。

「いや、そういうわけではございません。」

「それじゃ、どういうわけですか。」

「あなたは金を持っておいででしょうが……。」

「持っていますとも。」

と、男は言つた。

「だが私の所には、へやがないのです。」と、主人は言つた。

男は落ち着いて口を開いた。

「うまやでもいふ。」

「でもおことわりいたします。」

「なぜできないのですか。」

「うまが、いっぱいはいつていますから。」

「そう、それなら、物置のすみでもけっこうです。わらが一たばあればよいのですが、そんなことは食事の後にしましょう。」

「どうも、御飯もあげることができません。」

これを聞いて、旅人は立ちあがって、

「は、あ、ふしん……。だが、私は腹がすいてたまらない。朝から歩き通した。三十五、六マイルも歩いた。代は拂うから、何かたべるものをもらいたい。」と言うと、主人は、

「みな、おあいにくさです。」と言った。

旅人は、せうら笑いをしながら、かまどや、なべの方へ向いて、

「何もない。ここにこんなにあるじゃないか。」と、あら／＼しく言った。

「それは、みんなあつらえものです。」

「だれの。」

「その人たち、馬力屋さんたちの。」

「幾人いる。」

「十二人。」

「二十人分もあるではないか。」

「それは、みな注文されたもので、もう前勘定でいたゞいてしまったのです。」

男は再び腰掛けて、今度は声を静かにして、

「私は宿屋にいろのだ。腹がすいている。こゝを動きはしない。」と言った。

すると、主人は、旅人の方へからたを伸ばして、低い声ではあったが、人をちどみあがらせるような調子で、

「出ておいで。」と言った。

旅人は、鉄の石突きイソギの附いているステッキで、火の燃え残りをかきまわしていたが、このことばを聞くと、急に向きなおって、何か言おうとしたが、主人は、じつと男の方を見つめて、同じ調子で言った。

「よせ。もうそんなことはしなくともいい。おまえの名を言ってみようか。おまえはジャンリヴァルジャンだろう。おまえがどんな人間だか、もうちゃんとよく知っている。おまえがはいって来た時、どうも少し怪しいと思ったので、市役所へ使をやって聞き合わせたのだ。これがその返事だ。おまえ、字が読めるかい。」

こう言って、主人は、市役所から来たばかりの開いた紙を男の方へ突き出した。男は、それをちらと見たが、手に取りもしなかった。主人は、ほんのちよつと黙っていたが、やがて、

「出ておいで。みんなに、ていねいな取り扱いをするのが、私の流儀だから。」と言った。

旅人は、頭をたれ、はいのうを取りあげて、出て行った。いたましい肩身の狭い人のように、小さくなって、あてどもなく歩いて行った。一度も振り返っては見なかったが、もし振り返って見たならば、宿屋の主人が戸口に立って、そこへ寄り集まった客や通行人といっしょに、うしろ指をさしながら、いろ／＼と話し合っているのに気がついたであろう。こわさと、いやな氣持をこも／＼と表わした

その人たちの表情から、かれがこゝへ来たことがすぐ町じゅうのうわさになるだろうということにも、気がついたであろう。けれども、この男は少しもそんなことを知らなかった。悩みのある人間には、あとを振り返って見るひまなどは、もちろんないものである。

この男は、しばらく、疲れも忘れてとぼ／＼と歩いていたが、にわかには飢えの苦しみを感じた。夜はもうせまっていた。どこかとまる所はないかと思まわすと、ちょうど、その道のはずれの方に、あかりが一つ光っていた。よく見ると、このあたりは居酒屋からもれたものであった。

旅人はちよつと立ちどまった。そうして、小さな窓から中をのぞいて見ると、酒場の低いへやの中には、小さなランプが一つ、テーブルの上についていて、かまどには、火がいきおいよく燃えていた。幾人か飲んでいる者もあったが、主人は火にあたっていた。鉄なべは、火の上にかゝって煮えたっていた。

この酒場の入口は二つあって、一つは表通りからと、もう一つはごみだらけの小庭からとであった。

この男は、表通りの入口からはいる勇氣はなかったので、こそ／＼と小庭の方へまわって、また一度立ちどまった。それから、こわ／＼戸の掛けがねをはずして、戸をあけた。

「どなたでございます。」と、主人は声をかけた。

「夕飯ととまりを願いたいのですが。」

「かしこまりました。夕飯とおとまりなら、こゝでできます。」

旅人は中へはいった。飲んでいた人たちは、みんなこの男の方を振り向いて、この男がはいのうをあるすのを注意して見つめていた。顔が、一方からはランプで照らされ、一方からはかまどの火で照

らされていた。

「こちらに火があります。夕飯は、今なべの中にしたくしておりますから、こちらへ来ておあたりなさいませ。」と、主人は言った。

旅人は、火の近くにすわって、疲れはてた両足を火の方へ伸ばした。なべからは、うまそうなおいが漂って来た。縁のさがった帽子の下から見えるだけの様子では、その顔は、いかにも氣持よさそうであった。

けれども、テーブルに着いている人たちの中に、あの宿屋の主人といっしょに入口で大騒ぎをした馬力のひとりがいた。この馬力は、酒屋の主人を手招きして、自分の所へ呼び、何か低い声で、二言三言、話し合った。

すると、酒屋の主人は、火の方へ帰って来て、あら／＼しくその男の肩へ手をやって、ぶあいそうに、

「こゝから出て行ってもらいましょう。」と言った。

旅人は、振り向いて、静かに、

「あゝ、あなたは知っておいでですか。」と言った。

「そう。」

「みんなは、私を、あっちの宿屋から追い出したのです。」

「それだから、今度は、私たちがこゝから追い出すのだ。」

「では、私はどこへ行けばいいのですか。」

「どこか、ほかへ。」

この男は、ステッキとはいのうを取りあげて、また出て行った。そうして監獄の前を通った。入口に呼びりんの鉄の鎖がさがっていたので、それを鳴らすと、格子戸があいた。この男は帽子をとって、ていねいに、

「牢番さん、今夜一晩、私をこゝへとめてくださいませんか。」と頼んだ。

「監獄は、宿屋でも酒屋でもない。しばらく置いて。そうしたら入れてやろう。」返事はこうであった。格子戸はしめられた。

夜は、ずん／＼せまって来た。寒いアルプス風が吹き荒れていた。だん／＼消えて行くうすあかりに、道に面した庭の中に、しばで作った小屋が一つ見えた。旅人は、大胆にも木のかきを飛び越えて、庭の中にはいった。そうして、その小屋へ近寄った。戸は狭くて、入口は低かった。これは道ぶしんの人夫でもこしらえた掘立小屋によく似ていた。こういう小屋は、ふだん、夜は人のいないものである。旅人は、しゃがんでその中へもぐりこんだ。中は暖かで、氣持のいいわらまで敷いてあった。かれは疲れのため身動きもしないで、この寢床の上でちょっと休んだ。背中のはいのうがしゃまでもあったし、またちようどまくらにもよかろうと思つて、その革ひもをはずしかけた。その時、ただけだけしいぬのうなり声が出た。見あげると、小屋の入口に、恐ろしいブルドッグの頭が見えた。これは犬小屋であったのだ。そこでかれは、ステッキをつかんで、はいのうを盾に構え、できるだけうまく、犬小屋からぬけ出した。そうして、庭に出た。けれども、かれのぼろ／＼になった着物のほ

ころびは、更に大きくなってしまった。

かきねをよじのぼってしまふと、また、もとの道であった。あのそまつな犬小屋のわらの寢床からさへ追ひ出されて、自分の身を休める所としては、どこにもないのに氣がついた。石の上へ腰を掛けるというよりも、むしろ身を投げるようにして、

「私はいぬにも及ばないのか。」と嘆いた。

それから、また、立ちあがつて、てく／＼歩きはじめたが、かれは、町から出はずれたら、その辺の木の下か、乾し草の下で、身を隠す所ぐらいは見つかると思つて、首をうなだれて、しばらく歩いて行った。もう、よほど歩いたと思つた時、目をあげて、自分のまわりを見まわした。かれは野原にいたのであった。目の前には、もう取り入れもすんで、刈りこみをした頭のように、かり株でおゝわれた、低い小丘があった。自分の二、三步先にたゞ一本、おかしな木が立っているだけで、この野原の中にも、丘の上にも、何一つなかった。あたりがいかに荒れはてて、ものさびしかったので、旅人はちよつと考えたが、急いでもとの道へ引返して、また、町へ足を運んだ。城門はもうしまつていたので、古い城壁の崩れた所からはいった。もう、夜の八時ごろであった。町の道筋を知らなかったで、あてどなく、やたらに歩いて行った。この町のすみには印刷所があったが、かれは、もう疲れはてて、欲も望みもなくなつてしまつて、この印刷所の前にある石の腰掛に横になつた。

ちようどその時、ひとりの年とつた女が、教会から出て来た。女は暗やみの腰掛の上に人が寝ているのを見て、

「あなた、そこで何をしておいでなさるのですか。」と言った。

男は、腹立ちまぎれにとげ／＼しく、自分の持ちまゑの調子で、

「わかつていら、ばあさん、寝るのだよ。」と言った。

「腰掛の上で。」と、女は言った。

「私は、十九年の間、一枚の板ぶとんの上に寝たのだ。今夜は石ぶとんだ。」と、男が言った。

「あなたは兵隊さんですか。」

「そうだ、ばあさん、兵隊さんだ。」

「なぜ、宿屋へおいでなさらないのですか。」

「金がないから。」

「あら、まあ。私の財布には四スーしかありませんが。」と、女が言った。

「それでもいいから、こちらへおくれ。」

男は、その四スーを受け取ったが、女は、なおことばを続けて、

「そんな少しの金では、宿屋へとまゐることはできません。でも、もう行ってごらんになったのですか。

こゝでは夜を明かすことはできません。寒くて腹がすいてお困りでしょう。みんなは、たゞでもあなたをとめてあげなくてはならないのに。」と言った。

「私は、一軒残らずまわって来た。」

「それで、どうなさいました。」

「どこでも私を追っぱらったよ。」

この親切な女は、男の腕へ手をあてて、この町の向こうがわにある司教邸——司教は施療院に提供しているのであるが——と並んだ、今、司教の住んでいる小さな低い家をさし示して、

「あなたは、どこでも、一軒残らずまわられたのですか。」と聞いた。

「そうだ、まわった。」

「あそこ、あの家へも行きましたか。」

「いや、行かない。」

「それではあそこへ行ってごらんないな。」

二

その夜、司教は、八時ごろには、まだ何か書きものをしていた。そこへ、女中のマグロアル老女が、いつものように、寝台の近くにある戸だなの、銀の食器を取りにはいつて来た。それから少したつて、司教は、もう食事の用意ができて、妹もさだめし待っているだろうと思つて、ペンを置いて食堂へはいつて行った。

ちょうど、司教がはいつて行った時、マグロアル老女は戸じまりをよくした方がよい、ということをお話していた。老女が、夕飯の用意をするために外へ出て行った時、人相の悪いひとりの浮浪人が、この町のどこかにひそんでいるから、よく気をつけて、家の戸をしめ、かぎをかけて、まちがいの起らないようにしなければいけないということを、聞いて来たらしかった。

つめたいへやからはいつて来た司教は、火の前へすわつてあたりうとした。すると、老女は、またそれをくり返して話した。

司教は、いすを半分ばかり向けなおして、そのきげんのよい顔を老女の方へ向けて、「よし／＼、一体、それがなんだというのかい。何か危険なことでもあるのかい。」と言った。そこで、老女は、また自分の話を始めた。

「この町に、氣味の悪いこじきのようなふうをして、はいのうとステッキを持って、恐ろしい顔をしたす足の浮浪人が、ひとりいるのでございます。」

「ほんとうに。」と、司教は言った。

「ほんとうでございますとも、御前様。今夜、この町で何かきつと起りますから、ごらんなさいませ。みんなそう申しております。私、今からじょうまを屋へ行って、戸の古いかぎをなますように言つて参りましょうか。」

ちやうどこの時、入口で戸をたたく大きな音が聞えた。

「おはいり。」と、司教が言った。

戸があいた。男がひとりはいつて來た。この男はあの旅人であつた。背中にはいのうを背負い、手にはステッキを持っていた。目はものすごくかじやいていた。かれは、両方の手を棍棒こんぼうの上へもたせながら、司教の答を待たないで、大きな声で言った。

「これをごらんください。私は、ジャン・ヴァルジャンという者です。私は罪人です。十九年の間、監獄にいました。四日前に許されたのです。この四日の間にツーロンから歩いて來ました。今晚ここに着いて、一軒の宿屋へ行きましたが、私が黄色い通行券を持っているというので、——これは、どうしても市役所へ見せなければならぬものですが——そのために私を追い出しました。ほかの宿屋

へも行きましたが、やはり『出て行け。』と言うのです。監獄にも行きましたが、牢番は私を入れてくれません。私は、犬小屋へはいこみました。すると、いぬは私にかみついて、私を追い出しました。

私は、野原へ行って、星の下で寝ようと思いましたが、星は一つも出ていません。雨が降りそうでした。そこでしかたなく、どこかの人家の戸口で露をしのぐうと思つて、また、町へもどつて來ました。そうして、この町内で石の上に横になっていますと、親切な女が、『あそこへ行つてごらん下さい。』と言つて、あなたのおうちを教えてくださいました。それでおたずねしたようなわけです。こちらはなんでございますか。宿屋でございますか。私は、金は持つております。どうも、ひどく疲れて、腹がすいてたまりません。とめていたじけましようか。」

「マゴロアルさん、こゝへもう一人まえ、食事のしたくをしてください。」と、司教が言った。

旅人は、驚いて、テーブルの上にあるランプの近くまで、三足ほど進んで、

「お待ちなさい。」

と叫んだ。考え違ひをされているのではないかと思つたらしく、

「そんなことではないのです。あなたは、私の言ったことがおわかりになりましたでしょうか。私は罪人ですよ。今、監獄から出て來たばかりですよ。」と言つて、ポケットから大きな黄色い紙を一枚出した。かれは、それを拵けて、

「これが、私の通行券です。それ、ごらんの通り黄色いでしょう。これですから、どこへ行つても追ひ出されるのです。ごらんください。こゝに、『この男はいたつて危険な人物である。』と書き入れて

あります。その危険人物が、今、あなたのそばにいます。だれでも、私を追い出さない者はありません。それでもあなたは、この私をとめてくださいますか。何かたべる物を少しくださって、そうして、どこかへ寝かしてくださることができませんか。」と言った。司教は、

「マグロアルさん、寢所の寢台に、白い敷布をしきなさい。」と言った。そうして、男の方に向いて、「あなた、すわっておあたりなさい。すぐ御飯ができますから。たべている間にあなたの寢床の用意もできます。」と言った。

男は、はじめて、よくわかった。顔つきは、妙に変わって来て、氣の狂った人のようにどもりながら口をきき出した。

「ほんとうに、あなたは、私をとめてくださいますか。追い出しはなさらないのですか。まあ、私にこゝを教えてくれたあの女は親切な人だった。私は、金を持っていますから、十分にお拂いします。失礼ですが、あなたのお名まえはなんとおっしゃいますか。あなたは宿屋の御主人ですか、そうでしようか。」

「私は、こゝに住んでいる牧師です。」

「牧師さん。では、こゝは教会ですか。そうして、あなたは司祭さんですか。それでは、金などはお取りにならないのですか。」と、男が言うと、司教は、

「はい、もらいません。金はそちらへしまっておきなさい。」と言った。

マグロアル老女は、食器を運んで、それをテーブルの上に置いた。司教は、

「その食器を、なるだけ火のそばに置きなさい。」と言って、それから、客の方に向いて、

「アルプスからの夜風は、全く、つめたくてたまりません。さぞ寒かったですでしょう、あなたは。」と言った。

司教は、話をするたびに、そのやさしい親切な声で「あなた」ということばを使ったので、男の顔は生き／＼して来た。

「なんだかランプがたいへん暗いね。」と、司教は言ったが、マグロアル老女は、すぐにはみこんで、司教の寢室へ行って、ストーブの上から銀の燭台を二つ持って来て、それに火をともし、テーブルの上に置いた。

「司祭さん、あなたは親切なおかたですね。私をけいべつなさらないで、家の中へ入れてくださって、私のために、わざ／＼ろうそくをつけてくださいます。私がどこから来たもので、また、どのくらいみじめな目にあつたものであるかということをご隠しませんでしたのに。」と、男が言った。

司教は、靜かに男の手に触れて、

「あなたがどんな人であるかという事は、私にお話しにならなくてもよいのです。あなたが、心をいためておいでなさるか、飢えかわいておいでなさる時には、いつでもおいでになってよいのです。それがために、私にお礼などをおっしゃるにはおよびません。第一、私の家の中へお入れするのだと、お考えになつてもいけません。こゝは、だれの家でもありません。隠れ場所のなくなつて困る人のための家です。私よりも、むしろ旅人のあなたの方が、いっそう、安心していられる所だと、御承知になればよいのです。こゝにある物は、みなあなたのもです。なんのために、私があるのか、お名まえを知る必要がありません。それに、あなたが言われない前から私はあなたの一つの名まえを知っ

てあります。」と言った。

驚いたのは、この男であつた。男は目を大きくして、「ほんとうですか。あなたは、私の名まえを知つておいでになつたのですか。」と大きな声で聞きかえした。

「知っていましたとも。あなたのお名まえは『私の兄弟』というのです。」と、司教が答えると、男は叫んで、

「お待ちください、お待ちください。私は非常に腹がすいていたので、こゝへうかゞつたのですけれども、あなたがこんなに親切にしてくださるので、今ではもう腹がすいているのかどうなのか、わからなくなつてしまいました。そんなことは通り過ぎてしまつたのです。」と言つた。

司教は、また男を見つめながら、

「あなたは、ずいぶんお苦しみなさつたのでしょうな。」と聞いた。

「はい、どうも。赤い仕事着を着せられて、重い鉄の玉と鎖をつけられて、寝るのは板の上で、暑さにも寒さにも、ちよつとしたことにもむちで……これで苦しまないわけはありません。まあ、いぬ、いぬの方が、よほどしあわせです。」

「そうでしたか。あなたは、実に苦しい場所から出て來られたのです。しかし、お聞きなさいよ。あなたがその苦しい場所から出て來て、かりにも、世の人を憎んだり、怒つたりするならば、あなたは、あわれむべき人として終るのですが、そこから出て來て、りっぱな志と、親切と、おだやかな考えを持つておられるならば、あなたは、私たちのだれよりも幸福な人です。」と、司教は言つた。

そのうちに、マゴロアル老女は、食事の用意をした。老女は、司教の命を待つまでもなく、自分で承知して、上等の古いぶどう酒一びんを添えて出した。

司教は、晴れ々しい顔をして、いかにも愉快そうであつた。元氣のいいことばで、

「さあ、おあがりください。」と言つた。そうして、その男を自分の右にすわらせた。司教の妹は、全く無言のまま、しとやかにその左にすわつた。司教は祈りをあげて、それから、いつもと同じように、自分で勝手にスープをついで吸つた。男は、わき目もふらずに、むさぼるやうにたべた。

「テーブルが、何か少し物足らないようだね。」

司教は、突然こう言つた。

実は、マゴロアル老女は、必要な三人まえだけの食器を備えたのであつたが、この家のならわしとしては、司教がだれかと夕飯をたべる時には、テーブルの上に、六人分の銀の食器をそろえて出すことになつていた。——つまり、罪のないみえから來たものであつた。

マゴロアル老女は、それに氣がついた。一言も言わないで出て行つたが、少したつと、司教の言つた三人分の食器が、別にテーブルの上に輝いていた。

旅人は、振り向きもしないで、飢え死にしそうな人のように、大口をしてたべた。けれども、食事がすんでから、

「司祭さん、私には、これだけでけつこうすぎますが、正直に申しますと、私といっしょにたべるのをいやがつた、あの馬力どもは、あなたよりも、よほどよいものをたべています。」と言つた。

「あの人たちは、私よりもほねをおりますから。」と、司教は答えた。

「いゝえ、たくさん金を持っているからです。あなたは貧乏です。そうですね。あなたは、司祭さんでもないでしょう。あゝ、神様が公平なら、あなたは、りっぱに司祭さんになれるのですのに。」と、男が言った。

「神様は、この上もなく公平ですよ。」と、司教は言ったが、少したつて、

「ジャン・ヴァルジャンさん、あなたは、ポンタルリエへおいでになるのだとおっしゃいましたね。」と聞いた。

「しかたなしに行く旅なのです。あすは、夜の明けるのを待ってたたなければなりません。旅をするのはつらいものです。夜は寒いし、晝は暑いのですから。」

「あなたのおいでになる地方は、よい所ですよ。革命で私のうちがちぢれた時、私は、しばらくあそこへ行って、労働して身を支えていました。仕事がたくさんあるので、困るのは、たゞ、自分でどれを選ぶかということだけです。あなたのおいでになる土地には、一つ、非常に楽しい仕事があります。それは、牛乳をしぼる仕事です。これには、種類が二つありますが、一つは、金持の持っている大牧場の仕事です。こゝには、四、五十頭のめうしがいて、一夏に、七、八千斤のチーズをこしらえます。もう一つは、山の中に住んでいる貧しい農夫たちの持っている組合搾乳所で、これは、めうしを幾匹か共同で持つていて、そのあがり高を互に分けるのです。こゝで、チーズの製造人を雇っていますが、製造人は、日に三度牛乳を受け取って、その乳量を書き入れます。」と、司教は話した。

司教は、これらの搾乳場は、この男にとってまことによい隠れ場所だから、それをさとしてくれればよいと願って、チーズ製造人のよい職業であることを、こまかに話したのであった。すると、旅人は、非常に元氣づいて来たように見えた。

「お茶がすんで、感謝の祈りをあげてから、司教は、男の方に向いて、

「あなたは、たいへん疲れておいででしょうから。」と言って、立ちあがった。それから、テーブルから銀の燭台を取って、一つは自分が持ち、一つは客に渡して、

「さあ、あなたのへやへ御案内しましょう。」と言った。客は、あとへついて行った。

この家の建て方は、寢所のある禮拜堂へ行こうとするには、司教の寢室を通り抜けなければならぬようにできていた。ふたりがこの寢室を通ろうとしている時、ちょうど、マグロアル老女は、寢台の上の方にあるコップだなへ、銀の器をしまっているところであった。これは、老女が毎晩寢る前にする、一番最後の仕事であった。

司教は、きれいな白い寢床のあるへやへ、客を連れて行った。客は、小さなテーブルの上に燭台を置いた。

「ゆっくりお休みなさい。あすの朝はお出かけになる前に、うちのうしからしぼった温かい乳を一ばさしあげましょう。」と、司教が言うと、男は、

「ありがとうございます。」と言ったが、そのおだやかなことばと同時に、突然、変な身振りをした。もし、この家のふたりの婦人がそれを見たなら、きっと、ちぢみあがったに違いない。男は、急に司教の方を向いて、両腕を組んで、猛悪な目つきをして司教を見つめながら、あら／＼しい声で、

「あゝ、そうか。なるほど、こんなふうには、あなたのごく近くへ私を寢かすのですな。」と叫んだ。それから自分をおさえつけたが、なんだかすこみを帯びた笑いをしたあとで、

「あなたは、これを、考えてなさったのですか。私が人殺しをしないとは限っていませんまい。」と言った。

「それは、神様が御存じのことです。」

司教は、こう答えて、右の手をあげて、その男のために祝福した。そうして、そのまゝあとも振り返らずに、自分のへやへ行った。

ジャンリヴァルジャンは、全く疲れきっていたので、せっかくのきれいな白いふとんのありがたみを知ろうとさえしなかった。囚人がよくするように、鼻息でろうそくを吹き消し、着物を着たまゝ、寢床の上に身を投げ出して、ぐっすり寝こんでしまった。

夜中の十二時が鳴って、それから少したつと、この家の者は、みんな眠ってしまった。

三

教会の時計が二時を打った時、ジャンリヴァルジャンは、目を覚ました。寢床がよすぎたから目が覚めたのであった。それから、目をあけて、うすあかりの中であたりを見まわした。いろ／＼の考えが起って来たが、どうしても消え去らないものが、一つあった。食事の時、マゴアル老女がテーブルに置いた六組の銀の食器と、大きな一つのさじに目をとめたのであったが、この六組の銀の食器が、かれをとらえて放さなかった。そうして、これは、わずか二、三步のうちにあるのだ。みんな昔の純銀であった。この食器と、大さじとをいっしょにすれば、少なくとも、二百フランにはなる——十九年間働いてためた金高の二倍である。

それから、ちょうど一時間、食器のことで苦しんだ。そうして、三時が鳴った。すると、急いで半

身を起し、腕を伸ばして、寢所の片すみ位置いたはいのうを手探りした。それから、両足を突き出して、床へつま先をつけて、寢台へ腰掛けたまゝ、しばらくの間ぼんやりしていたが、にわかには思い立ったように、身をかじめて、くつを脱ぎ、それを静かに寢床の前のくつぬぎの上に置いた。それから静かにすわったが、もし時計が十五分か三十分には鳴らなかつたら、おそらく夜明けまで、そのまゝそこにいたのであつたらう。この男には、時計が「さあ、始めよう。」というように聞えた。すぐに立ちあがつたが、またちょつとためらつて、よく耳をすました。家の中はひっそりとしていた。そこで、よく氣をつけて、窓の方へまっすぐに歩いて行った。夜は暗くなかつた。満月であつたので、そのうすあかりで、十分足もとを見分けることができた。窓へ行ってみると、横木も渡してなく、たゞ小さなくさびでとめてあるだけであつた。窓からは庭がよく見えた。男は窓をあけたが、身を切るようにつめたい風がへやへ吹きこんで来たので、すぐにまたしめた。

男は、目を見張つて庭の方を見ていたが、それは、見るといふよりも研究しているのであつた。庭は、わけなく登れるくらいのも、ごく低い白壁で囲われていた。これだけを見とゞけると、男は、もう決心したもののようになり、寢所の方へ行き、はいのうを取つて、中を探り、何か取り出して、それを寢床の上に置いた。それから、くつをポケットの中へ押しこみ、はいのうを肩に掛けて、帽子をかぶり、ひさしを目の上へ深く引き上げた。それから、今度は、ステッキを手探りで取つて、窓のすみへ持つて行つて置いた。そうして、寢床へ帰つて来て、そこに置いたものを取りあげた。——一方の先がやりのようにとがっている短い鉄の棒——これは、抗夫の用いるきりであつた。そのきりを右手に持つて、息を殺して、忍び足で司教のへやの入口の方へ進んで行った。

入口へ行つてみると、戸は、掛けがねもかけてなかった。司教は、戸をしめてなかったのだ。ジャンニヴァルジャンは、耳をすました。物音は、何一つ聞えなかった。そこで、ねこのようにおくびょうな気がねをしなから、ごく軽く戸を押した。戸は、押されるまゝにそれだけ音も立てずに動いた。少し立ちどまってから、今度は、もう少し大胆に押した。戸は、やはり静かにそれだけ動いて行った。そのあきぐあいは、自分が通り抜けるには、もう十分であった。が、戸の近くに小さなテーブルがあつて、入口をふさいでいた。ジャンニヴァルジャンは、このじゃまものを見つけ出した。どんなことがあつても、これを、もっと廣くあけなければいけない。そこでまた、三度めを押した。前より固かったので、さびたちょうつがいが、不意に暗やみの中で、耳ざわりな長いひびきのきしむ音を立てた。ジャンニヴァルジャンは、震えあがつた。このちやうつがいの音は、ジャンニヴァルジャンの耳には、世界の終りの日のらっぱのように、鋭く恐ろしく鳴りひびいた。一時は、もう命はないものと思つた。そうして、かたくなつて、動く氣もなく静かに立つていた。耳をすまして聞くと、この音ではだれも目を覚まさなかつた。これで、まず、さしあつた危険は無事に過ぎたが、胸の中は、まだ、恐ろしいどろろがしてやまなかつた。けれども、しりぞみするようなことはしなかつた。頭の中にあるたゞ一つのは、速くするだけのことをしてしまおうといふのであつた。それで、一足踏み出すと、もうへやの中にはいつていた。

へやの中は、全く静まりかえつていた。ジャンニヴァルジャンは、氣をつけて物をよけながら進んだ。向こうのすみで、司教の眠つてゐる静かな息が聞きとれた。ジャンニヴァルジャンは、にわかに立ちどまつたが、もう寢床の近くにいた。自分で思つたよりも速く、こゝまで來たのであつた。

小半時間ばかり前から、大きな雲が出て、空は暗くなつていた。ちやうど、ジャンニヴァルジャンが寢床の前に立ちどまつた時、雲は心ありげに裂けて、月の光が、にわか高い窓からさしこみ、司教の青白い顔を照らした。寢てゐる司教は、さながら後光の中にいるようであつた。その上、あたりの静けさが、このけ高い司教の休息に、一種不思議ないかめしさを添えた。

ジャンニヴァルジャンは、この光に輝いてゐる姿を見て、恐れを抱いて、手に鉄のきりを持つたまま、影の中に突つ立つて、身動きもしないでいた。その様子は、司教の頭を打ち碎いてしまふか、それとも、その手に接吻しようか、どちらにしようかと思案してゐるようであつた。しばらくそうしていたが、それから、静かに左の手を額にあげて、帽子をとつた。司教は、なほも、ごく深い平和のうちに、すやく眠つていた。

ジャンニヴァルジャンは、突然帽子をかぶつて、それから、急いで、司教のまくらもとの近くにあるコップだの方へまっすぐ行つた。そうして、きりをあげてじょうをこわそうとしたが、かぎは、それに附いていた。戸だのをあけると、まず目についたものは、銀の食器のいつてゐるかごであつた。そこでそれを取つて、もう音などには氣がねせず、急いで大またに歩いて、戸の外に出た。礼拝堂へはいつて窓を開き、ステッキを取つて外へ飛び出した。そこで、はいのうの中へ食器を入れ、かごを投げ捨てて、駆け出して庭を横切り、とらのようにへいを乗り越えて、逃げ去つた。

四

次の日、朝日ののぼるころ、司教が、庭を散歩していると、マドロアル老女が、まるで氣違ひのようになつて駆けて來て、大きな声で、

「御前様、御前様。御前様は、銀の食器のはいつているかごが、どこにあるか御存じでございませうか。」と言った。

「あ、知っているよ。」と、司教が言った。

「まあ、よかった。私は、それがどうなったのかわかりませんでしたので。」と、老女は言った。

司教は、ちょうど、花壇でそのかごを見つけたばかりであった。それをマグロアル老女に渡し、

「これ、こゝにあるよ。」と言った。

「そうですか。でも、中にはなんにもないではございませんか。で、銀の食器は。」

「あ、おまえの心配しているのは、銀の食器かい。それは、私も知らない。」

「それはたいへんです。盗まれたのでございますよ。昨晚こゝへ来たあの男が盗んだのでございますよ。」

こう言つて、マグロアル老女は、目をばちくりさせながら、礼拝堂へ駆けつけて、寢所にはいり、それから司教の所へ帰つて来たが、司教は、投げつけられたかごのために折れた一本の花を、腰をかがめて、いたわしい思いでながめていた。

「御前様、あの人はもういなくなりましたよ。銀の器は盗まれたのです。」

マグロアル老女がこう騒ぎたてたので、司教は、老女の方をちょっと見たが、しばらく黙つていた。それから、静かに口をひらいて、

「まあ、第一、あの銀の器は私たちのものであったらうか。」と言った。

マグロアル老女は、返事もしなかった。少したつて、また司教は続けて「私は久しい間、まちがっ

てあの銀の器を横取りしていたのだ。あれは、貧しい人のものだ。あの人は、どんな人であつたらう。確かに貧しい人であつた。」と言った。

「あらまあ、なんとおっしゃいます。私のためでも、お嬢様のためでもございません。私たちには、

どっちでも同じことでございます。が、御前様のために心配いたすのでございます。御前様は、これから何でお食事をなさいますか。」と、マグロアル老女は言った。

「すゞの器がなかったかな。」

「すゞはにおいがしていません。」

「それでは、そう、鉄の器は。」

「鉄は味が悪うございます。」

「そう、それでは木の器だ。」

それからまもなく、司教は、昨夜ジャンリヴァルジャンといつしよにすわつた、その同じテーブルで、朝飯をたべた。司教はそばに黙つていた妹と、何か口の中でぶつ／＼言つていたマグロアル老女とに向かつて、牛乳の中にパンの小切れを浸してたべるには、実際、木のさじもフォークも何もいらないものだという話を、愉快そうに話して聞かせた。

「こんな考えをしている者がどこにあらう。あんな人間を家の中に入れて、自分のそばへ寝かすなんて。それで、どんな御利益があつたかといえは、なんだ、あの男は、人のものを盗んで行ってしまつた。考えるだけでもどつととする。」と、マグロアル老女は、へやを行つたり来たりしながら、ひとりごとを言った。

司教と妹が、テールから立とうとしている時、ちょうど、入口でだれか戸をたたく音がした。「おはいりなさい。」と、司教は言った。

戸があいた。見ると、異様なもの／＼しい姿をした人たちが、入口に現われた。三人がかりで、ひとりの男のえり首をつかまえていた。その三人は憲兵で、つかまえられているのは、ジャン・ヴァルジャンであった。隊長らしく見えたひとりの士官が戸の近くにいたが、司教の方へ進んで来て、軍人風の敬礼をして、

「御前様。」と言った。

この一言で、今まで陰気な顔をして、ひどくしおれかえていたジャン・ヴァルジャンは、まのぬけたような様子をして頭をあげて、口の中で、

「御前様……そうすると、たゞの司祭ではないな。」とつぶやいた。

「黙れ、このかたは、司教様だぞ。」と、士官がしかりつけた。

そのうちに、司教が、足ばやに出て来て、

「あゝ、あなたもいたのですね。」と、ジャン・ヴァルジャンの方を見ながら、

「よくおいでなされた。それにしても、私は、燭台もいっしょにあなたにあげたつもりでしたがね。

あれもやはり銀で、二百フランぐらいにはなりますよ。なぜ、あの食器といっしょに持っておいでなさらなかったのですか。」と言った。

ジャン・ヴァルジャンは、とても口では言い表わすことのできない顔つきをして、司教の方を見た。

「御前様。それではこの男の言うことはほんとうでございますか。私たちは、道で出会いましたのですが、一足飛びに逃げ出したものですから、つかまえて調べてみました。そうしたら、この銀の食器を持っているのです。」と、士官が言った。すると、

「そうして、この男はこう言いましたでしょう。」と、司教は、にこ／＼しながら、士官のことばの先へまわって、

「この食器をくれた年をとった牧師の所へ一晩とまったのだと。みんなその通りです。それを、あなたがたは、これまで連れておいでなされたのですな。それは、全くお考え違いです。」と言った。

「お話のような次第でしたら、このまゝ許すまでです。」と、士官が言った。

「もちろん、そうです。」と、司教は答えた。

そこで、憲兵は、ジャン・ヴァルジャンを放したが、ジャン・ヴァルジャンは、しりごみしながら、ちょうど、寢言でもいうような声で、

「ほんとうに、私を許してくれたのかしら。」と言った。

「そうだ、おまえは、もう、行きたい所へ行っている。わかったか。」と、士官が言った。

「お待ちなさい。ここにあなたの燭台がありますから、行く時は、これも持っておいでなさい。」と言って、司教は、ストーブの上から、二つの燭台を持って来て、ジャン・ヴァルジャンに渡した。ふたりの婦人は、司教の氣にさわるようなことは、一言も口へ出さず、また、身振りにも、顔色にも出さないで、静かにそのすることをながめていた。

ジャン・ヴァルジャンの手足は震えていた。そうして、見知らぬ人のような顔つきをして、渡され

たま、黙ってその燭台を受け取った。

「さあ、それでは静かにおいでなさい。ついでに言っておきますが、今度からおいでなさる時は、庭の方からおいでなさるにはおよびませんよ。いつでも、前の入口から出はいいりをしなさい。戸は、夜晝とも、たと掛けがねでとめてあるきりですから。」と、司教が言った。

それから、憲兵の方へ向いて、

「みなさん、どうぞお帰りください。御苦労でした。」と言ったので、憲兵たちは行ってしまった。

ジャンリヴァアルジャンは、氣を失いかけている者のようだった。

司教は、更にそばに寄って、低い声で、

「忘れてはいけませんよ。決して忘れてはいけませんよ。あなたは、正直な人間になるためにこの銀の器を使うのだと、私に約束したことを。」と言った。

ジャンリヴァアルジャンは、こんな約束をしたことを思い出せなかったので、当惑して立っていた。

「ジャンリヴァアルジャンさん、私の兄弟のジャンリヴァアルジャンさん、あなたは、もう悪人ではありません。

善人ですよ。私があなたのために買おうとしているものは、あなたの魂です。私はあなたの魂をば、暗い心や、破滅の世界から引き出して、そうして、それを神様にさしげるので。」と言った。

國語学習の手引

中等國語三(2)に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によつたものである。こゝに記さない教材は、古典ならびに文部省作である。

課名	題目	原作者	訳者	原典
一	樹木賛仰	尾崎喜八	中学校生徒	高層雲の下
二	生活断片	天野貞祐	天野貞祐	「婦人之友」第四十一卷第二号
三	文化と教養	芭蕉の名句	頼原退藏	芭蕉の名句
四	芭蕉の名句	乙女峠の富士	佐藤信衛	「新潮」第四十三卷第六号
五	銀の燭台	水野葉舟	ヴィクトルリュ ーゴー	フランス小学読本
六				

國語學習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を學習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を發表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、調査研究のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味ある正しい學習を進展させて行つてほしい。

一 樹木賛仰

- (1) 読んで、感じたことを話し合う。
- (2) 作者はしいの木に、どんな意味を見つけたか。
- (3) その意味について話し合う。
- (4) 表現のすぐれたところを書き出してみる。
- (5) 朗読のくふうをして、お互に聞き合う。
- (6) 自然から見つけ出した意味や教訓を詩に作つてみる。

二 生活断片

- (1) 生け花について、話し合う。
- (2) できたら、お茶を立て、それについて話し合う。
- (3) 「生け花」「お茶」の文を読んで、感想を述べたり批評をし合ったりする。
- (4) 自分たちの生活断片を書いて発表し合う。

三 文化と教養

- (1) むずかしい語句を取り出してみんなで調べる。
- (2) 次のことがらにつき、作者の見解を調べてノートに書く。
 - イ、文化の意義と特質
 - ロ、文化國家
 - ハ、教養
- (3) この課には、いろいろ大事な問題が含まれている。それについて考える。(例えば、文化はネクタイのようなものだという見解はどうか。)
- (4) 文化や教養という面から、自分たちの生活を反省した作文を書く。
- (5) 作者の人生観について考える。

人の生活

四 芭蕉の名句

- (1) 著者の見解を参考にして、次の四組のおの／＼について二つの句のよしあしを考える。
 - 何となく何やらゆかしすみれぐさ
 - 山路来て何やらゆかしすみれぐさ
 - さびしさや岩にしみこむせみの声
 - 閑かさや岩にしみ入るせみの声
 - 白露もこぼさぬはぎのうねりかな
 - 白露をこぼさぬはぎのうねりかな
 - 旅に病んで枯れ野をめぐる夢心
 - 旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる
- (2) 二十五ページの句の中から、好きな句を選んで評釈の文を書く。
- (3) 次の和歌と俳句を比べて、気づいたことを話し合う。
 - 吉野川岸のやまぶき咲きにけり峰のさくらは散りはてぬらむ(中等國語三)一(一)

中等國語

三

(2)

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE June 21, 1948)

發行所

東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

印刷者

東京都北区稻付町一丁目二〇八番地
二葉印刷株式會社
代表者 大野治輔

發行者

東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 阿部眞之助

著作權所有者
著作兼發行者

文部省

昭和二十二年九月四日印刷
昭和二十二年九月八日發行
昭和二十三年六月二十一日修正印刷
昭和二十三年六月二十五日修正發行
昭和二十三年六月二十五日修正印刷
昭和二十三年六月二十五日修正發行
〔昭和二十三年六月二十五日 文部省檢査済〕

廿
荒川
佐津
子

作
三

荒川佐津子用